

## 英語教育における自律した学習者養成とICT

酒井 志延

言語は使用を通して習得することが望ましいが、その場合は対象言語に十分に触れることが必要である。日本の英語教育では現在コミュニカティブな英語指導法が主流である。しかし、日本では英語に触れる時間が教室での使用に限られているため、指導効果が出ず、英語学力低下が叫ばれている。その時間不足を補うためにe-Learningを課外で活用することが考えられるべきだが、現在は、e-Learningが広がっていない状況にある。その原因の大きなものに、学習者の自律性を高めることが考慮されていないことにある。本稿では、学習者が自律性を高めるために、自己効力感を高めたり、ストラテジーを学ぶのにe-Learningでの学習の効果を考察した。そして、自律性を高めることにより課外学習が進み、英語力を向上させるとした。それに加え、リメディアル教育における英語学習に有効なストラテジーを英語習熟度別に示した。

### キーワード

学習者自律, e-Learning, 自己効力感, ストラテジー, 課外学習

### 1. 背景

#### 1.1 課外での学習の必要性

「英語の使用」を通しての英語を習得させる教育についての主張が大きな潮流を占めている。確かに言語は母語話者が習得するように使用を通して学ぶ方法が最良である。しかし、その場合、習得対象の言語に触れる時間の量が問題となる。英語母語話者が「英語の使用」を通して母語を習得する時間について、鳥飼(2006:19-20)は、10才の子どもが起きていて英語にふれるのは少なく見積もって平均1日10時間とし、10年間では36,500時間としている。しかし、日本での学校では、英語にふれる時間は10年間で1,000時間くらいだろうと述べている。コミュニケーションなど「英語の使用」を通しての言語を習得する場合、周りにいる親が子供の理解レベルにあった言葉で相手をするように、相手の理解レベルに適した言語レベルでのやり取りが必要である。

どの環境においても当てはまることだが、英語のクラスは人為的に習熟度別にしない限り、学習者の習熟度のレベルは様々ではない。また、日本の学習環境は、教師一人で多人数を相手にする一斉授業である。そうすると、ある程度の量の知識を教えながら、一人一人の学習者のレベルに焦点をあわせた授業を行うことはかなり困難に近い。言語学習は、目標言語でコミュニケーションをとる機会が教室以外に無い環境においては、「慣れるまで習えというのが外国語学習です」(鳥飼 2006:154)で

あるので、文法や単語を覚えた後に、学習者はそれらを内在化するためにこつこつと自律的に練習しなければならない。このことをうまく表現している言葉がある。終わりを三つの「き」でまとめた「英語の勉強は根気、暗記、年季」である。この表現は、覚えやすくしかも英語教育学を研究してきた立場から考えてみても真理を言い当てている良いフレーズだと思っている。なぜなら、日本のように英語が教室外ではほとんど話されない環境では、英語を使用する時間のほとんどが教室に限られてしまうので、学習者は言葉の使用を通してだけでは、英語を習得することは困難だからである。そのような環境における英語学習は、単語や文法の暗記は必須である。しかもその学習は長年かかるので辛抱が必要である。「英語の勉強は根気、暗記、年季」という表現は、そういう多くの人の経験をうまく言い当てている。したがって、世代を超えてその言葉も受け継がれてきたのであろう。つまり、日本のような学習環境で英語を習得しようとするならば、課外にこつこつと練習しなければならない。

#### 1.2 課外での学習法

日本の英語教育において文法訳読式指導が主流であった時代には、課外での学習は学校で使う教科書の予習と復習が中心であった。学習方法は、労力を必要とするが、明解である：教科書に出てくる新出単語の意味を調べること、本文をノートへ書き写すこと、その英文に和訳をつけること、授業中、自分の訳と模範訳を比べ学習すること、試験前にそのノートで復習することが基本である。Sakai (1990) は、この方法が全国的なものであり、ま

た彼が調査した関東地方では学校の成績ランクとこの学習方法の実施率が比例していると報告している。この学習方法がそのように広がった理由だが、全国的な調査があるわけではないので、その方法の利用者やその方法を勧める教員へのインタビュー等を通してのものだが、その方法は学習労力が膨大であるという欠陥は持つもの、授業を理解させやすくし、その後の試験での高得点につながるストラテジーであったからである。

### 1.3 学力低下の問題

90年代後半以降、訳読式授業に替わり、言語の使用を通して言語を習得させるコミュニケーション型授業が主流を占めるようになった。すると、斉田(2002)が指摘するように、コミュニケーション型指導法が『指導要領』に反映されるたびに、高校生の英語力の低下が観測されるようになった。また、「長崎大の吉村幸准教授は、90～04年に出题された大学入試センター試験の英語の問題から、文法の設問を使って、学生の英語力の変化を研究した。その結果、96年を境に偏差値が10程度落ちたという。吉村准教授は「97年以降は学習指導要領などで、コミュニケーションが重視されるようになって文法の学習量が減ったのが原因ではないか」と説明する」(毎日新聞 2008)。

コミュニケーション型指導法は、英語が日常的に話されている国・地域で発達した指導法である。そのような言語環境においては、学習者は教室で学んだコミュニケーション型英語を教室外つまり実社会で応用することができ、その結果、英語でのコミュニケーション能力を向上させていく。当然、学習者も教室でのコミュニケーション型学習の習得に自然と熱心になる。したがって、このような言語環境ではコミュニケーション型指導法が有効であることがわかる。

しかし、教室外ではほとんど英語が話されない日本では、事情が全く異なる。つまり、教室外において英語でのコミュニケーション型活動がインターネットを使った活動を除くと従来からある読書やビデオ視聴以外にはほとんど無い日本では、まず、教室で学んだコミュニケーション型英語はほとんど実社会で試すことはできない。つまり、英語の使用は教室だけに限られている。したがって、コミュニケーション型指導法だけでは、英語に触れる時間が少なく、実践的コミュニケーション能力を伸ばすこともできない。それに加えて、現在までコミュニケーション型指導法の研究者及び実践者は、学習者は明確で試験での高得点につながる課外での活動や学習方法を提示することをしてこなかった。また、訳読式時代に用いられていた課外での学習方法も、教室での指導法が異なるので、課外での学習方法としてあまり顧みられなくなってきた(石田・緑川・久村・酒井・笹島 2001)。その結果、学習者が課外で学習しなくなった。このようなことも、学

力低下の現象の大きな要因である。

コミュニケーション型英語が指導の主流になりつつあるこのころから学校教育への不振がさらに高じ、受験テクニックを学ぶために教師の予備校見学が始まったり、高校で予備校の授業を衛星放送を通して受講させることはやった。当然、金銭的に余裕のある家庭では、進学塾に子供を通わせ、学校でも塾と連携して補習をやるところができてきた。このようにコミュニケーション型授業の足りない部分を課外学習および授業テクニックで補おうとしたが、英語力の低下傾向には歯止めがかからなかった。

かといって、全面的に訳読式授業には戻ることはできない。なぜなら、英語の指導法では、世界の潮流がコミュニケーション型指導法であるし、訳読式の長所は幾分採り入れるとしても、訳読式授業は英語を使える学習者を育てにくいという欠点の多い教授法であるからだ。そうすると、日本で学ぶ学習者の英語力を高めるためには、教室ではコミュニケーション型方法で指導し、その上で、学習者に効果的な課外学習方法を示し、彼らの課外学習時間を増やすことが重要である。その一つの解決方法として、学習機器の利用が考えられるであろう。

### 1.4 学習機器と課外学習

一般に、一斉授業では退屈してしまったり、逆にいつて行くのを難しいと感じてしまったりする学習者がいる。以前より、多くの教員はそのような個人に焦点を当てた課外での自律的な学習を助ける指導を効果的にできないものだろうかと願ってきた。テクノロジーが進んでくると、そのテクノロジーを効果的に利用し、学習のプロセスを明確にした機器であれば、課外に学習者が自律的に学習するのではないかと考えるようになる。その一つの形が英語科にあったランゲージ・ラボラトリー(通称LL)である。LLはスピーカのない個人用テープレコーダについたヘッドセットをつけ、ヘッドセットから聞こえてくる指示に従って練習する個人学習機である。LLは学習者一人一人のペースで学習させることができるし、学習者に納得がいくまで学習をさせることができる。したがって、個人学習に向いている機器で、一斉授業に比べ、言語の習得に有効である面を持つ。しかし、LLはいまだ大学では健在のところがあるが、中学校や高校では使われなくなったところが多い。その結果、LLマーケットは縮小してしまい、LL機器の大手メーカーであったソニーは2005年にLL事業から撤退していった。このようにLLでの指導が衰退してしまった理由として考えられるものは：

- 1) LLが開発された頃は、持ち運びやすいテープレコーダが入手しにくい時代だったので、英語母語話者の音声を教室に持ち込むのが難しかった。現在は、携帯性に富んだテープレコーダはもとより、CDや

MD など簡便な機器が比較的安価で入手できるし、外国人講師が配属されたりして、普通教室でもかなりの音声訓練ができるようになった。

- 2) テクノロジーが進んで、LL 機器が高度になったために、操作に熟練を要するようになり、機器についての知識をあまり持たない教員に使いこなせなくなってしまった。
- 3) コミュニカティブな英語の授業が推奨され、機械を使っただけの反復訓練型の教授法が敬遠されるようになった。

等であるが、これらの理由に加えて、学習者の自律性が関係していると考えられる。なぜなら、LL 学習機は前述したように個人練習機なので授業外に学習者が練習するのに向いている。しかし、LL を使った教育の学会でも研究成果は、授業内での使用の成果だけで、個人学習機としての利用の研究発表はほとんど無かったと言っている。つまり、自律的に学習センターで学習するのは難しいことだ。そのことを確かめるために、Sakai・Chu・Takagi・Lee (2008) は、日本、韓国、台湾の4大学の学生107名に「いままで、大学の学習センターで英語を学習をしたか」について2006年に調査した。その結果、1割の学生が肯定的な回答をした。続く2007年に酒井・高木・朱は、日本と台湾の18大学からの学生902名に対して「今後、大学の学習センターで英語を学習をするか」と質問した。その間に、肯定的に回答した学生は2割程度であった。このデータから考えも多くの大学生が課外で自主的にLL機器等を使って英語を学習するとは考えにくい。

この原因を考えてみる。LLのヘッドセットを装着しての練習は、人間同士のペアでやる練習とは異なり、あらかじめ録音されているパターンに限りがあるので、活動自体が変化に乏しく飽きやすい。また、練習時に装着しなければならぬヘッドセットは、外部の音声を遮断するため、耳全体をカバーするタイプで、5分程装着していると耳に違和感を持つ。しかし、LLの練習で効果を上げるためには、ある程度の長い時間をかけなければならない。つまり学習者ががまん根気を求める。勉強のためにそういうこと我慢できるほどの自律性の高い学習者でないと、学習を継続することが難しいのである。またかなり大きいと考えられる理由としては、課外でのLLの学習は、ほとんどがリスニング練習が中心の発展的または補足的なものであり、訳読式の課外活動のようにそれをやらないと授業が理解しにくかったり、その後の試験での高得点につながる活動ではなかったのである。

また、LL機器は大きな特徴として、授業で1人の教員が学習者を個人別に学習を指導できる機能を持っている。しかし、その方法での指導を実施するには、かなり

の知識と技術と準備が必要であるので、大抵の授業は、学習者が自分で教材を選択できない1本の音源を使う方式になりがちであった。つまり、教室でテープレコーダの代わりにLL機能を使う程度になり、一斉授業の延長の様なものになる。そうすると、LL教室を導入したり、維持管理したりするために高額な費用を使う価値を次第に見いだすことができなくなったのであろう。

その後、LL学習機に代わり、コンピュータを使った教育が目ざされ始められるようになった。英語教育では、授業において練習がかなりの部分を占める性質や、LL授業を経験したり、テープレコーダなどの教育機器を日常的に使った授業に習熟したりしている先生が多いせい、コンピュータを使った指導が開発されたのはかなり早い時期であった。開発当初は、CAI (Computer Assisted Instruction) と呼ばれていたが、その後 Computer Assisted Language Learning (CALL) と呼ばれるようになった。e-Learning という名前が普及した現在でも、CALL の呼び名を好んで使う人もまだいる。つまり、LL指導から、CAI、CALLそしてe-Learningとスムーズに移行が可能になった教科である。したがって、CALLのソフトを含めなくても、市販されているe-Learningの種類は他の教科の追従を許さないであろう。

現在、英語授業における利用だけではなくe-Learningが目ざされている理由の一つは、e-Learningでは、学習者が自律的に学習を進めていくことができるように思えるからである。確かに、e-Learningでの学習は、学習者の都合の良い時間に、一人で学習を進められる機器であるし、学習のコースを選ぶことが可能である。これに加えて学習の履歴を確認できる。これらの機能を持つe-Learningでの学習は、自律性が高くない学習者が、技能や知識を習得する方法としては、それ無しの方法より個人レベルの学習において優れていると考えられる。

しかし、現実には「日本の大学においてe-Learningの実践が拡大しないという現象」(吉田 2006)がある。これには、教員のe-Learningに対する期待が過大であることが原因の一つではないかと思える。繰り返すが、e-LearningではLL機器よりはるかに個人レベルの学習に対応している。しかし、現実には多くのe-Learningが開発されて、e-Learningには学習のためのプログラムが用意してあるが、学習者は自分で能動的に学習を進めて行かなくてはならないのが基本である。日本の環境で学ぶ大学生は、教師主導型の授業を好み、自分で能動的学習を進めるということは、あまり得意ではない。そのためか、筆者の周りで英語をe-Learningを使って指導している英語教員を見ると、授業時間に組み込んで使用しているか、授業時間とその後課題という教員が強制した形での指導がほとんどである。つまり何らかの教員の関与が欠かせない。

このようにLLやCALLのようなシステムがスムーズ

に多くの学校に導入されたのは、良い学習環境を与え、個別学習を行いやすいように整備すれば、学習者は課外でも積極的にその施設を利用してくれるのではないかという期待が教員にあるからである。そのような考えは、自律した意欲のある学習者については当てはまるであろう。しかし、自律性が低い学習者については疑問である。

そのことを確かめるために、小野・酒井(2005)は、同じような教育機器環境を持つ3つの大学・短大において、英検レベルで5級から3級レベルの学習者に英語力を上げるために、e-Learningでの課外学習の可能性を2ヶ月にわたり調査した。その結果、課外でのe-Learning学習でも、教師が細かく出席をチェックし、学習習慣が形成するまで指導した学校は、学習者の自律性を高めることができ、その結果、課外での学習において成果を出した。逆に、そのような指導をしないでe-Learningでの学習機会だけを与えた学校では、自律性を高めることもできず、結果として学習成果を出せないことを示した(小野・酒井 2005)。つまり、同研究は自学自習ができるe-Learningでの学習環境を与えても、教員が何らかの関与をしないと、学生はe-Learningで課外での自学自習できないことを明らかにした。この研究の結果は、いまもって教員関与のないe-Learningでの課外での学習成果をうたった研究報告を目にしたことがないことから妥当であると判断できる。

では、すべての科目で、課外でのe-Learningは難しいのであろうか。たぶん、継続的な自己努力をさほど必要としないで成果を目で見るができる学習、例えば、ネット上に母語で書かれた情報を得るといような行為であれば、多くの学習者は自分で積極的に学習を進めていくことができる。また、プレゼンテーションソフトの使い方なども努力をしないで成果が出る例であろう。学生のプレゼンテーションでは、目を見張るくらい良い作品を見ることがある。しかし、かなりの自己努力が必要で、少しばかりの努力では成果が出にくい学習、たとえば、語学学習などにおいては、目新しい機器や学習システムを与えただけで、自律性の低い学習者の大半が進んで自ら行うということはほとんど起こりえない。これは、以下のことから理解できる。高価なテープレコーダしかなかった時代と比較すると、現在は個人が安価で購入できる使い勝手の良い語学学習用の機器や興味深い学習ソフトウェアは市場に氾濫している。しかし、現実には日本人の英語力の低下を指摘する報告(齊田 2003, 小野 2005)は多くなっているが、英語力があがったという報告はほとんど無い。つまり、英語学習においては、長期にわたる自律した学習が必要であり、それがないと言語学習は成功しない。つまり、e-Learningを使った英語学習では学習者の自律性について考える必要がある。そうしないと、英語学習のe-Learningの研究は、うまくいかないだろう。

## 2. 本研究の目的

日本で英語を学ぶ学習者の自律性を高め、課外で自律的に学習させるために、ICTをどのように開発・活用すれば効果的であるかを考察する。

## 3. 英語の習熟度と自律性の関係

英語学習では、e-Learningでの学習に限らず学力を上げるためには自分で律して課外で勉強をしなければならぬから、自律性は英語学力と関係すると考えても良い。つまり、英語圏の国で英語を習得してからの帰国子女などを除き、学力の高い者ほど、自律性が高い傾向を持つことは推察できる。その英語力と自律性を考える意味で、日本英語検定協会(英検)の調査が興味深い。英検の試験は、受験者の英語力を7段階に分けて判定している。その7段階の合格者に対して2005年度にアンケート調査を実施し、合格者の英語学習状況および英語使用状況を調査した結果、合格者を表1のように分類した。

表1 英検合格者とその特徴

段階	特徴
英検5級から英検3級まで	依存型学習者
英検準2級と英検2級	自立型学習者
英検準1級と英検1級	自立型使用者

『STEP 英語情報』(2006)

つまり、英検5級から英検3級までの学習者は、かなり教師依存的である。教材の選定、課題学習の設定や実施、記録、そして評価などほとんどを教師に依存して力を伸ばす層である。次の英検準2級から英検2級までの学習者は、ある部分は教師に依存はするかもしれないが、自分で目標を立てたり、課外でも進んで勉強したりできる層である。最上の英検準1級と英検1級の合格者は、英語学習というより、日常的に英語を使用するという層である。この表からも英語の習熟度が高い学習者ほど自律していると言えるし、成績が上がっていくと自信がつき、自律に向かうということも予想できる。学習者自律性を高めるためには成績を上げさせることも重要な点である。

e-Learningを使用の有無にかかわらず、課外での英語学習では、初習者は自分で使う教材や学習方法を選択したりすることができないが、中級者になると、ある程度そのようなことをできる力が養成される。むしろ、上級者になるとさらに高い判断力を持つだろう。次にその自律性についてみてみることにする。

## 4. 学習者の自律について

### 4.1 自律性についての先行研究

1980年代および90年代に行われた自律に関する研究をまとめてKumaravadivelu (2003) は、学習者の自律を養成することは、学習者が以下の点をできるように支援することであると示した：

- (a) 自律した学習ができるように能力を発達させること、
- (b) 目的を達成させるために責任持つことと適切なストラテジーを使うこと、
- (c) 彼らの潜在的な学習能力を発見させること、
- (d) 学習過程における弱点や失敗に立ち向かい、解決すること、
- (e) 自尊心を高めたり自信を持てるように自制心や自己訓練能力を発達させること、
- (f) 教師や教育システムから指導に対する単なる反応を超えた動きができること、
- (g) 自分自身、教師、タスクそして教育環境との相互作用においてその複雑性を理解できること

教員の助けもあるにせよ、自律性を高めるために学習者自身がまず努力しなければならない。以上のような自律性を習得するためにはどのような努力をするのだろうか。次は、学習者の努力について考えてみる。

### 4.2 自己効力感とストラテジー

一般的に、個人は自分の生活に影響を与える諸事情を制御しようとすると言われている。その努力は、その個人の日常生活のすべての範囲におよぶ。その制御は良い影響をもたらす場合もあれば、影響をもたらさない場合もある。多くの試行錯誤を通して、個人は経験したことの無いタスクに出会っても対処できるという感じを持つようになる。この感覚を自己効力感という。この感覚は多種多様な経験の積み重ねによって形成されるものである。自己効力感とは、自分の外の環境を変えることを可能するように思える感覚といわれている。Bandura (1977) によると、自己効力感が高い学習者は、自信がない学習者より、より多くの努力をしたり、タスクをより持続的に行うと言われている。それゆえ、自己効力感を高めることは、学術面も含め個人的および社会的な利益を得ることに確実に寄与する。

Dörnyei (2001 米山・関 (2005) 訳) は、外国語学習者の持つ学習動機として、学習ニーズと自信をあげた。自信はその性質より自己効力感の高さに下支えされる。そこで、この自己効力感と英語力の関係についての調査を見てみる。

Ohno・Nakamura・Sagara・Sakai (2008) は、英語を専攻しない学部での200名の1、2年生に対して実施した調査結果からも裏付けられる。その調査では、成績が優秀な英語学習者は、教員に依存的でありながら自己効力

感を高める努力をしているタイプであった。また、英語の成績がふるわない学習者は、自己効力感を高める努力を学習の早い段階でやめてしまったものであるようだと言った。つまり、学習者の自律を高めるためには学習者に自己効力感を高める努力を促すことが有効であると言える。

森 (2006) は、自己効力感の高い学習者は、学習ストラテジーを使用する傾向にあることを報告した。つまり、Sakai (1990) が訳読式授業においては課外での明確な学習方法が示されており学習者はそれを身につけることによりテストでの高得点とともに英語学習に対する自信を持っていたと指摘したように、学習者は学習ストラテジーを含む何らかの学習方法を身につけることで、自信を持ち成績を伸ばしていくのである。逆にストラテジーや学習方法を身につけない学習者は成績を上げることができず、自信を持っていない場合が多い。

以上の考えを踏まえて、e-Learningが、自律性や自己効力感を高めながら、ストラテジーを獲得していくために効果的な学習機器であるかどうかを考察していく。

## 5. 自律性を向上させる学習機器としてのe-Learning

### 5.1 課外学習について

自律性の低い学習者は、新たな学習を始めた最初の段階では、その学習に対する親近感や高成績に結びつく可能性を見つけれない、この学習方法を続けると自分の学力は上がるという将来の見返りが不確実である。しかし、学習者が何らかの理由で学習を継続して行った場合、学習方法に慣れたりして、親近感や成績に結びつく可能性を次第に獲得していき、自信を深めていく。したがって、学習に成功させるための第一は、いかにその学習を継続させるかである。無論、「継続は力なり」と昔から言われるように、学習の継続は難しい。では、e-Learningは、学習継続のために効果的であろうか。

小松川 (2006) は「大学におけるe-Learningの定着に向けて」というシンポジウムの中で、数学の指導において、教員が課外での学習者の学習履歴をこまめにチェックし、学習が行われていない場合には、当該の学習者個人にその学習を促すことにより、課外で、e-Learningを使わない学習よりも使う学習の方が学習時間を伸ばすことが可能となり、そのことによって学力を伸ばすことができると報告している。

前述した小野・酒井 (2005) の研究で、成績向上の点で成果を上げた学校では、2ヶ月にわたる学習期間の後半になると、教師は受講者に対して出席を促す必要がなくなった。受講者は教師が出席を促さなくても自然に集まり、自分で学習するようになった。つまり、教師の指導を含むe-Learning学習を継続することにより、学習習慣が付き、学習者としての自律性を高めたと推察できる。この課外学習に使用したe-Learningには、ヒント閲覧機

能、辞書使用機能、出題採点機能、学習記録閲覧機能、音声による出題などを利用することができた。したがって、課外学習がこのような機能がない書物を通して行なわれるものであったなら、教師が出席を強要した前半は参加しても、出席を促さなくなった後半に、受講者自身だけで学習を続けることは難しかったのではないかと推察できる。この実験では、教員の適切な指導も含まれるが、e-Learningによる学習をしたほとんどの学習者が、学習を継続させ、いろいろな学習機能を使い、そして成績を上げ、そして規定の学習を終了させた。

上記2つの報告から、e-Learningは、適切な教員による指導も含むが、Kumaravadivelu (2003) が自律性養成のために述べた7項目の内、「(a)自律した学習ができるように能力を発達させること」、「(b)目的を達成させるために責任持つことと適切なストラテジーを使うこと」、「(c)彼らの潜在的な学習能力を発見させること」、「(e)自尊心を高めたり自信を持てるように自制心や自己訓練能力を発達させること」を促す可能性のある学習システムであると言える。

## 5.2 授業とあわせての使用

次に、授業に関連して使用した場合のe-Learningの学習と自律について考察してみる。大学生の英語力にも大きな幅があるので、英語の学力が低い学習者が多い学校、中堅の学校そして、高いレベルの学校からの3つの報告から論じる。

### 5.2.1 英語習熟度が低い学習者が多い学校

大崎・箕輪 (2007) は、学力の低く、自学自習の習慣もなく、英語の学習方法が身につけていない学習者に対し、教科書の授業を実施しながら、課外で教科書に関連したe-Learningの学習を課した。その結果、e-Learningでの学習が「意外とおもしろかった」、「自分の分かっている部分があった」、「学習の習慣がついた」という肯定的評価を得られたと報告している。この結果は、e-Learningの学習が、Kumaravadivelu (2003) の述べる「(a)自律した学習ができるように能力を発達させること」、「(c)彼らの潜在的な学習能力を発見させることに寄与できること」を表している。

### 5.2.2 中堅の学校

CALL教育の第一人者の一人である小張 (2006) はe-Learningに関するアンケート調査を実施した。そのデータからe-Learningのメリットを拾い出すと、1)教員との距離が近くなる点、2)課題を提出しやすい点、3)e-Learningには、多彩な学習支援機能があるので学習しやすい点、となる。この3点について、自律性との関わりで考えてみる。まず、一つ目の「教員との距離が近くなる点」であるが、大学の授業に限らず、試験前を除けば、日本では学習者が教員に対して疑問点を質問することは希である。質問がないので、解っているのかとノー

トなどを覗いてみると、疑問を質問できないでいる学生が意外と多い。その度に、気軽に質問できないほど距離があるのかと感じる。一方、e-Learningでは、練習問題やドリルを解答すると、すぐレスポンスが返ってくる。そして、誤答した箇所には詳しい解説がある。メールで質問できる。このようなe-Learningの機能が、学生と教員の距離を縮め、教員のサポートを受けやすくし、学習を進めていると推察できる。

二つ目の「課題を提出しやすい点」についてであるが、この項目でも、日本の大学生は、教員に近づくことを負担に感じていることを示している。その負担を軽減すると課題実施率の向上につながる。課題の作成は、自己学習の評価になるので、それを作成させ提出させることをより容易にすることは、より多くの学習者に自己効力感を高める機会を与えていると言える。

三番目であるが、「学習の向上に役立つ点」は、e-Learningによる学習は平均的な大学生に多彩なツールを使いこなさせ、自己効力感を高め、その結果、学習能力を向上させていることが推察できる。逆に考えると、小張の学生があげた3点は、e-Learningでない授業において、学生が自律性を高めるのを妨害しているのかもしれない。e-Learningでない授業は、教員との距離が近くなく、課題は出しにくく感じさせているのかもしれない。そのため、自己効力感を高めることができないのであろう。つまり、e-Learningには、上述したように、学習支援機能が多くついているので、学習者はそれ無しの方法より自己効力感を高めることができる。英語学習において有効であることが推察できる。

以上の結果は、教員の支援を必要とするが、疑問点などをより頻繁に質問したり課題を出しやすくするので、Kumaravadivelu (2003) の述べる「(d)学習過程における弱点や失敗に立ち向かい、解決すること」につながると考えられる。

### 5.2.3 英語習熟度が高い学習者が多い学校

酒井 (2007) は、TOEICテストに対する実力を養成することが目的の一つである授業において、実験の開始時に授業内で単語テストを実施し、被験者の語彙力を測定し、被験者の語彙力レベルにあった、しかもTOEICテスト学習に有効な英単語学習を課外で携帯電話によるe-Learning (アルク社作成) で2ヶ月間実施させた。成績にe-Learningでの学習履歴を加味すると伝えた。実験期間終了後、回答者からのアンケート結果を因子分析した結果、「自律した学習の継続」という強い第1因子が抽出された。また、回答者の50%以上が「学習履歴を成績に反映すると言われなくても学習した」と回答し、60%以上が、この課題に加えて、さらに別の課題をやりたいと回答したと報告している。e-Learning終了後に学習者から高い課題への要求がでたことは、Kumaravadivelu (2003) が述べる「(f)教師や教育システムから指

導に対する単なる反応を超えた動きができること」をこの e-Learning 学習が満たしたと考えられる。

以上の考察から分かるように、e-Learning を使った研究報告をまとめると、Kumaravadivelu (2003) が学習者の自律性を高めるために必要な7項目のうち6項目までを満たす機能を有することがわかる。したがって、e-Learning での学習は、適切な指導があれば学習者自律を養成する可能性を持つ学習システムであると言える。また、教員の適切な指示及び支援によって課外で学習をしやすくする学習システムであると言える。しかし、効果的な学習が身につくストラテジーや効力感を高める学習方法は、当然どの学習者にも同じようにあてはまるのではなく、英語の習熟度レベルによって異なるはずである。次にそのことを見ていくことにする。

## 6. 効果的と考えられる e-Learning への提案

### 6.1 英語の習熟度と e-Learning

表1を参考にして、e-Learning での学習のための枠組みを考えてみる。英検5級から英検3級レベルの学習者は、かなり教師に依存した e-Learning での学習を行う層である。どのような e-Learning が良いのか判断できないし、学習の評価などもほとんどできない層である。次の英検準2級および英検2級をある程度教師に依存はするかもしれないが、自分で勉強ができる層である。ある程度教師の支援を受けながら e-Learning ができる層ととらえることができる。2級より上の層は、e-Learning というより、英語で書かれているウェブサイトを利用していく層であると考えられるだろう。それをまとめると、表2の様に表すことができるだろう。

表2 学習者の自律性と e-Learning

段階	特徴
5級から3級	教師の指示や支援があると e-Learning で学習できる層
準2級と2級	ある程度、教員の指示や支援があると自分で e-Learning で学習できる層。
準1級と1級	e-Learning で学習というよりは、ネットを使って、英語を使う層。

まず、5級レベルから3級レベルまでの学習者で考えてみる。中学校と高校をあわせると6年間英語を勉強してきたはずの大学生が、英検5級から3級レベルの英語力であることは、自分の英語力に自信がないので、自分で教材や学習方法を選ぶことができない。したがって、教員の指示によるものまたは授業に組み込まれた e-Learning (例：e-Learning での予習→対面授業→e-Learning での復習) という学習方法が良い。

英検準2級から2級の英語力では、英語で書かれたインターネットを使用して英語を習得するほどではない

が、教師が指示したプログラムであれば、自分で学習を進めて行ける層である。

英検2級レベル以上の英語力を持つ学習者に必要なのは、e-Learning のようなプログラム学習的なものというより、言語使用を通して言語運用能力を高めて行く英語学習機会の増加であろう。つまり、インターネットを使って情報を集めたり、その情報をもとにレポートをまとめさせたり、議論をさせたりする教育である。教員が指定したウェブサイトにある英語の論文を担当者が読み、その英語のサマリーを学習者グループに添付で配布し、その資料を基に掲示板等で英語による議論をする。教員もその議論の調整役をする。そのサマリーや発言内容で教員は学生の評価をする。同一時間帯に同一空間に集まる必要性がない。つまり、授業の中という限られた時間帯での議論ではないので、学生も発言内容の作成に時間をかけることができる。インターネットの利便性を生かした教育と言える。したがって、e-Learning における学習が有効なのは、英検2級レベル以下の学習者であると考えられる。

### 6.2 英語力判定

学習者が自分の学習を継続させられるようになるためには、自分の実力にあった教材で学ぶことが絶対条件である。いままで、この学力判定は、教員の仕事の領域であったが、自律性を養成するためには、できれば教員の手を介さず、学習者自身が行うのがよい。その点において、酒井・杉森・菊地・小野・久村 (2007) が開発した on-line による英語力判定テストに可能性がある。そのシステムでは、学習者はマニュアルに従い、コンピュータによる試験を受ければ、自分の実力が判定できるシステムになっている。現在では、教員が成績を管理しているが、簡単な改良で受験者が教員の手を通さず自分の実力を知ることができるようになる。このシステムを利用すると、学習者は自分の成績を自分で判定そして管理できるようになる。また、このテストの判定は、「中学3年生レベル」というように、中学と高校の学年レベルで判定されるが、換算表で英検のレベルを知ることができる。

### 6.3 各レベルに必要な e-Learning でできる学習内容およびストラテジー

現在の英語学習の e-Learning は、LL教材や CALL教材の継続した学習で総合的な英語力を伸ばすものや文法指導のドリル系が多い。その e-Learning での学習は、授業を個別化した授業の代替形である。もちろん、そのような e-Learning も必要である。課外での e-Learning 学習としては、授業では時間が十分にとれないために、やりたくてもできないような内容で、しかも課外学習として学びやすい e-Learning は必要性が高い。

そこで、本稿では、今までの研究で得られた知見など

を基に英語習得に有効だが、教室ではなかなか時間がとれないが、課外のe-Learningで効果的に学習することのでき、しかもほとんど既存のe-Learningで採用されていない英語を学ぶための学習項目について記述する。

#### 6.4 英語を学ぶための基礎学力

入試制度の多様化によって、個別に調べてみると、ほとんど英語ができないのに大学に入ってきている学習者がいる。アルファベットがきちんと書けないそして読めないという学習者さえいるという報告を受けることがある。そのことについての論文や研究大会などでの報告はないが、習熟度の低い大学生を教えている教員からはアルファベットがまともに書けない学生がいるとよく聞く。このように数年間の英語学習がほとんど無意味であった学習者が存在することを考えると、英語を学ぶためには、「英語を学ぶ基礎体力」が必要であり、その体力がないままに学習しても全く教育効果がないことが推察できる。つまり、そのような学習者は、その基礎学力ができる前に、英語学習に入っていったので、入門からつまずき、そしてそのまま英語の授業を理解できずに中学校および高校時代を過ごしてきたのであろう。

英語を学ぶ基礎学力についてだが、それを構成する要素はいろいろあるだろう。長年、英語習熟度の低い学習者を指導してきた経験から、以下の3つの項目は、存在すると推察できる。

- a) アルファベットを学習し、理解できる力を持つ
- b) 日本語の音声体系とは異なる英語の基礎的な音を認識する力を持つ
- c) 言語の持つ簡単な法則性を理解する力を持つ

高校や大学の一斉授業では、これらができていない学習者には学習者が学びなおそうと思ってもほとんど手をかけられない。しかし、この3つはe-Learningの学習でかなりの力を養成できると考えられる。上記の3項目に対してのe-Learningができる対策としては、次のものが考えられる：

- a) タイピングを利用したアルファベット練習は有効である。ローマ字の練習も効果的である。山田・松原・柳瀬(1988)は、中学生1年生に対して、ローマ字を指導した学習集団とグループとそうでない学習集団を作成して調査した結果、ローマ字の知識を持つことが英語学習に有利であると報告している。e-Learningでは、カナ漢字変換を使って、日本語の文を作らせることで十分効果的である。
- b) チャンクごとのポーズの長さを調節できるe-Learning。学習者の聴解で難しいのは、チャンクごとに捉えた音の意味を理解する前に新しい音のチャンクが流されることが考えられる。e-Learningでは、チャンクの間をポーズを自分の理解にあわせ

て調節できるようにすることと、英語の音を何度も聞けるようにすることと、2回以上聞いても解らない時には、日本語の意味が分かるようにする。このような練習は、英語の音の聞き取りに苦しんでいる習熟度の低い学習者には、対し、英語の音に慣れさせるのに効果的である。小野・酒井(2005)のリメディアル教育が必要な学習者に対する実験で、成績を上げることに成功した学校の担当者は、実験後に、被験者を観察した結果、学習者が学習を続けていたら、「最初はばらばらだった英語の音がつながって聞こえるようになって、英語が聞き取れるようになった」と感想を述べていたと報告している。

- c) 並べ替え英作文：日本のように、英語に触れる機会が限定されている環境下での英語教育では規則を覚えることが不可欠である。英文法を習得するのに、学習した文法を使つての英作文練習は効果的だが、自由英作文は、学習者にとっても負担が大きいし、e-Learningにとっても解答が多岐にわたるのですべてに対応するのは難しい。基礎的な文法を覚えさせるためであれば、ゲーム感覚で学べる並べ替え英作文が効果的である。e-Learningでは、与えられた日本語の文を作るのに必要な英語の単語を引いてきて、英文を構成する。解答が不正答である場合、間違っている箇所にある英単語が逃げていく作文練習はゲーム感覚でできるが英語の文構造を習得させるのに効果的である。

#### 6.5 自己効力感を高めるストラテジー

学習者の自己効力感を高めるためには、学習者とその学習に対して興味を持つ必要がある。学習者に学習に対して興味を持たせるためにはいろいろな方法がある。しかし、次のことは言えるだろう：1)学習者が無理なく学習に入っていける、2)自分の持っている知識を利用できる、3)学習者が必要としていて、しかもその学習内容を習得することにより、英語の力を伸ばせるという期待が持てるものであること。そうであれば、学習をある程度継続できれば、学習者はその効果を少しずつ理解できるようになる。

表2で示したように、授業と関連させたe-Learningの学習では、学習者は自律性を高めることは可能である。しかし、ここでは、自律性の低い学習者でも、課外の学習で多少の教員のサポートがあれば、学習の初期に学習を継続させることは、教員の役割の領域に入るのであろう。なぜなら、学習機器そのものは、「効果」について学習者に語りかけてくれないからである。そのような学習者を担当する教員は、学習者に自律を養成する方向で、学習者を励まし、彼らの目標を語り、彼らの学習のサポートをしたり、そして出席を促したりすることが肝要である。

ここでは、授業とは関係なく課外で学習でき、英語の習得に効果的でなおかつ自己効力感を高めるだろうと思えるストラテジーを習熟度別に記述する。

#### [5級レベルコース]

・カタカナ語の知識：カタカナ英語を英単語に結びつける練習。英文学者の加島（1994）は「日本人は誰もが、最も少なくても2000語、普通の人で5000語から10000語のカナ英語を知っている……〈中略〉英語を学ぶのに、また使うのにこれらを使用しないのはたいへんにモッタナイ」と述べている。筆者も台湾でカタカナ語が英単語を学ぶのに効果的であることを経験した。日本語ではカタカナで書く **present** を中国語では礼物と漢字にする。つまり日本の学習者はプレゼントを知っているので **present** の意味の一部をすぐ習得する。しかし、中国語母語話者の子供はカタカナを持つ日本語母語話者の子供のようにはいかない。台湾のホテルのフロントで、筆者が **bus**（中国語では公共汽車）を何度言っても理解しないので、空港に行く **bus** についての情報を得られなくて困った。カタカナ語を知っている日本人は、英語単語を覚える上で有利さを持っていると確信した。特に、カタカナ英語は外国語でも暗記しにくい名詞が多い。ここでは、カタカナ英語を5級レベルで学ぶ事項と書いたが、日本人が知っていると思われるカタカナ英語をレベル別に分類して、5級から2級程度まで学べる教材にすると、日本人の英語習得に大いに役立つと考えられる。e-Learning では、カタカナ語と英語のスペリングのマッチングで問題を作り、英語のスペリングをクリックすると、発音練習ができるようにすれば良い。ナイターなどの和製英語については、コラムで読めるようにするとおもしろいだろう。

#### [4級レベルコース]

・カタカナ読み練習：カタカナ読みは否定されることは多いが、音声学や英語母語話者の発音を基にして、英文にカタカナを振ると母語話者の英語のように通じる。脳科学者の池谷（2008）はカタカナ読みのフリガナを、「正しい読みを振れば、ネイティブにも十分通じる発音が可能だ。脳科学者である著者が、アメリカ留学時代に試行錯誤の末に独自に考案した「13の発音法則」に従えば、「自分の話している英語がまるで伝わらない」という最悪の事態から確実に脱することができる」と述べている。学習者がなかなか大きな声で音読しない原因の一つに、自分の英語の発音に自信が持てないという理由がある。したがって、早い段階から、英語らしい発音の訓練 e-Learning で学べると効果は大きい。カタカナ読みの e-Learning は、一定量の英文にカタカナ読みのフリガナを振っておき、一文単位でその文が読めるようになったら、学習者が自分でフリガナを消せるようにして、最終

的にはフリガナなしで英文が読めるようにする。

・チャンクリーディング：早い段階から、意味の固まりで英文を読むことを覚えさせることは、英語の語順で英語を理解させることにつながる。e-Learning では、200語程度の英文で練習する。練習をスタートさせると、毎分90語低度のスピードの英文が流れる。画面上の英文は、チャンクごとにスラッシュが入る。チャンク間のポーズは通常の1.5倍にする。英語の語順通りに理解できるようにするために、帰り読みはできないようにする。

#### [3級レベルコース]

・単語の作り方：学習者の語彙サイズが大きくなるにしたがって、単語のネットワークを作る基礎ができる。接頭辞や接尾辞をつけて派生語を作るストラテジーは、語彙習得に有効だが、時間が限られた授業中では、規則などを説明し、簡単に例を挙げるだけで終えざるを得ない。したがって、このような活動は十分に時間がとれる課外活動に向いている。3級では、-able, -ful, -ism, -ist, -ment, -ly などの接尾辞をつけて新しい単語を作る練習が良い。e-Learning では、接頭辞と接尾辞をつけられる単語のマッチングが最初で、単語が完成したら、日本語の意味とのマッチングが良い。

・代名詞の特定：英語の習熟度が高くない原因に、英語の代名詞の理解が不足している学習者がいる。It であれば機械的に「それ」、they であれば必ず「彼ら」と訳す。この化石化現象を壊すには、代名詞を含んだ問題をたくさん解かせて、自分で間違いに気づかせるが良策である。授業ではなかなかできないが、e-Learning では、以下に例を出す問題をたくさん解かせて効果的に気づかせることが可能である。

次の文（Part 1 in *Exceed*）を読んで、下線部の英単語が表すものを本文の単語を使って答えなさい。

Do you know the name of the highest mountain in the world? Of course, you 1do. It is Mt Everest, a mountain in the Himalayas. 2It is between Tibet and Nepal. Many people in the world have called the mountain Mt Everest for many years. But people in Tibet and Nepal have not called that name. 3They have their own names for the mountain. The Tibetans call 4it 'Chomolunma' while the Nepalese call it 'Sagamatha.' 'Chomolunma' means 'the Mother Goddess of the World', and 'Sagamatha' means 'the Head in the Great Blue Sky.'

- 1) do = (                    ) 10 words で
- 2) It = (                    ) 2 words で
- 3) They = (                    ) 5 words で
- 4) It = (                    ) 6 words で

岡・赤池・酒井（2004：243-244）

[準2級レベルコース]

・単語の作り方：準2級では、co-, con-, com-, en-, extra-, multi-, pre-, re-, sub-などの接尾辞をつけて新しい単語を作る練習が良い。e-Learningでは、接頭辞の場合と同じように、接尾辞と接尾辞をつけられる単語のマッチングが最初で、単語が完成したら、日本語の意味とのマッチングが良い。

・未知語の類推：学習者が文の中にある単語の90%以上知っているレベルの英文を使って未知語の類推をさせる。授業の予習として適切であるし、未知語を類推できるストラテジーを身につけることは、英語習得に大いに効果的である。読解力やスピードが個人によって差があるので、効果があると解っていても教室では実施しにくい。個人のペースで学習ができるe-Learningには適切な課題である。選択肢の意味は3級や準2級は、日本語でも良いが、2級では簡単な英語で与えてもよい。英文は、著作権の許可を得て、古い検定教科書を使うと良い。そうすると未知語は新出単語を使う。この問題を作るとき

1) 学習者が、文の大意を理解できている文を使う。未知語の類推の練習をする前に、大意把握で理解度を測り、そのチェックにパスした英文だけに挑戦させても良い。

2) 未知語の数は、20分の1以内。100語で5語程度にする。それ以外の未知語は、意味を与える。

例を出す。e-Learningでは、以下のような文を与え、下線部の単語の意味を類推させる。選択肢の作り方が、4つの単語に4つの選択肢では、類推と言わない。しかし、勝手に答えを書かせると、コンピュータの正答処理が難しいので、単語の数の5倍の選択肢、つまりここでは20個の選択肢を与えておくと良い。

1. 次の文の中の1~4の下線部の意味を類推し、下の語群から選びなさい。

Australia and New Zealand are located in the southern <sup>1)</sup>hemisphere. So they have <sup>2)</sup>opposite season as Japan does. That is, when Japan is having snowfall in winter, they are enjoying hot summer. Santa Claus has to go around in a heavy <sup>3)</sup>outfit in summer night there. In addition, the two countries have beautiful natural sceneries. So, many students and tourists from Japan visit the both countries to enjoy the scenery and to study the English language and the cultures. Some prefectures and cities in Japan and some states and cities in the both countries have a sister-city <sup>4)</sup>agreement. In the future the both countries and Japan will have much tighter relationship.

1) hemisphere = ( ), 2) opposite ( ),

3) outfit = ( ), 4) agreement = ( )

a. 敵の, b. 奇抜な, c. 四季がある, d. 水着, e. ソリ,  
f. 提携, g. 贈り物, h. 荷物, i. 農業, j. 砂漠,

k. 半球, l. 惑星, m. 会議, n. 反対の, o. 適切な,  
p. 地域, q. 考え方, r. 衣装, s. 環境, t. 野外の,

[2級レベルコース]

・クロスワード・パズル

クロスワードの練習で英英辞書に慣れさせる。

生徒に英英辞書を使用させる方が、読解力や単語力を生徒につけさせるのに有効である。しかし、なかなか英文を見て具象物を想像する力を生徒に育成できないために、英英辞書指導はうまくいっていない。下の枠にあるようなある英単語を連想させる英文を16文程度読ませて、クロスワード・パズルを作り、ゲーム感覚で英文読解に挑戦させる。教室でもできるのだが、未知語類推と同じように、読解力や読解のスピードに個人差がありすぎて、ゆっくり読む学習者には教室での指導は向かない。個人のペースでできるe-Learningでは、そのような学習者も効果的に力を伸ばすことができる。

The puzzle for this lesson is based on something that everyone talks about no one can do anything about — the weather. There are ten words reading across and six reading down. All right, shall we get started?

The first entry is something that makes it hard for us to see far away. It consists of fine droplets of water suspended in the air. It's like fog but isn't quite as thick. Japanese poets often write about scenes involving this. For those still having trouble, the first three letters of this word are the same as the first three of the longest river in the United States.

<中略>

The fourth entry is an object we use in rainy weather. It consists of a pole and cloth over a folding frame. We hold it over our heads to keep ourselves from getting wet. It can also be used to protect ourselves from strong sunlight. In this case, it's called a "parasol."

<中略>

(染矢・フェラッシー1987: 73-74)

1番の答えは、mistであり、4番の答えはumbrellaである。この課題は学習者が興味を持って取り組みしかも読解力の養成の学習と共に英英辞書の定義を読んで単語の意味を考える適切な練習になる。そして、この学習はe-Learningで行いやすい。

以上、本稿で紹介したe-Learningを開発すれば、学習者の英語力を課外学習をとおして、英語学習時間の増加とストラテジーの習得で、英語力を向上させることができると考えられる。

引用文献

Bandura, A. (1977). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, **84**, 191-215.

Dörnyei, Z. (2001). *Motivational Strategies in the Language Classroom* Cambridge University Press. 米山・関 (2005) 訳. 動機づけを高める英語指導ストラテジー 大修館書店.

池谷祐二 (2008). 怖いくらい通じるカタカナ英語の法則 講談社.

石田雅近・緑川日出子・久村 研・酒井志延・笹島 茂 (2001). 現職英語教員の教育研修の実態と将来像に関する総合的研究 平成12年度科学研究補助金基盤研究(B)研究成果報告書, 研究課題番号12480055.

加島祥造 (1994). カタカナ英語の話 南雲堂.

小張敬之 (2006). 私の e-Learning の成功と失敗 - 困難から問題解決への道 - 大学での e-Learning の成功のための学内での取り組みについて NIME 研修講座資料集 独立行政法人 メディア教育開発センター.

小松川浩 (2006). パネルディスカッション「大学における e-Learning の定着に向けて」での発言 大学での e-Learning の成功のための学内での取り組みについて 独立行政法人 メディア教育開発センター.

Kumaravadivelu, B. (2003). *Beyond methods: Macrostrategies for language teaching*. New Haven, CT & London, UK: Yale University Press.

Littlewood, W.T. (1999). "Defining and Developing Autonomy in Eastern Asian Context." *Applied Linguistics*, **20** (1), 71-94.

毎日新聞 (2008). 低迷する英語力 大学がてこ入れ 2月18日付朝刊.

Maslow, A. (1943). A Theory of Human Motivation *Psychological Review*, **50**, 370-396.

森 陽子 (2004). 大学生の自己効力感と英語学習方略の関係 日本教育工学会論文誌, **28**, 45-48.

岡 秀夫・赤池秀代・酒井志延 (2004). 「英語授業力」教科マニュアル 大修館書店.

小野 博 (2005). 基礎英語力低下の状況と改善策(上)中・高・大学生の英語力はなぜ下がったのか 英語教育, **53**, 66-69.

大崎さつき・箕輪美里 (2007). リメディアル教材 (English Quest) の活用例と授業外学習の実態 基盤研究(C)平成18年度科研費研究報告書 オンラインによる英語運用力判定テスト開発研究 研究課題番号17520397, 65-74.

尾関修二 (2006). 英語教育での e-Learning の活用と意義,

JACET 月例会での講演.

齊田智里 (2003). 高校入学時の英語能力値の年次推移 STEP BULLETIN, **15**, 12-22.

Sakai, S. (1990). A Study on The Relationship Between Detailed/Skeletal Instructional Notes and Cognitive Style (Field Dependence/Independence) of Japanese High School Students Unpublished Master Thesis to Joetsu University of Education.

酒井志延 (2007). 携帯メールでの単語テストによる学習についての研究 基盤研究(C)平成18年度科研費研究報告書 オンラインによる英語運用力判定テスト開発研究 研究課題番号17520397, 45-54.

酒井志延・杉森直樹・菊地賢一・小野 博・久村 研 (2007). オンライン・ベースのコンピュータ適応型テストの開発 基盤研究(C)平成17-18年度科研費研究報告書 オンラインによる英語運用力判定テスト開発研究 研究課題番号17520397, 1-44.

酒井志延・小野 博 (2005). 英語 e-Learning の確証実験 日本の大学生の基礎学力構造とリメディアル教育 NIME 研究報告, **6**, 111-119.

酒井志延・小野 博 (2007). 英語学習の e-Learning と学習者の自律性 基盤研究(B)平成16-18年度科研費研究報告書 e-Learning における学力対応型プログラムの開発に関する実証的研究 研究課題番号16300281, 30-39.

染矢正一・フレッド・フェラッシャー (1987). 英語のクロスワード 大修館書店.

STEP (2006). 英検合格者の「英語学習・英語使用状況調査」の報告 STEP 英語情報, **9-4**, 25-29.

鳥飼久美子 (2006). 危し! 小学校英語 文藝春秋.

山田 純・松浦伸和・柳瀬陽介 (1988). 英語学力差はどこから生じるのか 大修館書店.

吉田 文 (2006). e-Learning を規定する学内要因 大学での e-Learning の成功のための学内での取り組みについて NIME 研修講座資料集 独立行政法人 メディア教育開発センター.



酒井 志延

千葉商科大学商経学部教授。独立行政法人メディア教育センター客員教授。英語教育学修士。研究テーマは、ネットでのテスト開発、学習者の自律、現職英語教員の評価・研修。最近の論文は、*THE JOURNAL OF ASIA TEFL*, Vol. 5, No. 1, pp.93-117, に掲載された Teachers' Roles in Developing Learner Autonomy in the East Asian Region 高木, 朱 (台湾), 李 (韓国) と共著。Email address: shieni@cuc.ac.jp

# A Study on the Relationship between Developing Learner Autonomy and ICT in ELT

Shien Sakai

It is desirable to help students acquire English by using it. In this case, it is necessary for learners to be exposed to English as much as possible. However, in Japan, students' exposure to English is limited in classrooms. To make up for shortage of hours to be exposed to English, usage of e-Learning outside classrooms should be employed. In reality, e-Learning systems are hardly spreading among universities. One of the main reasons is that few reports claim the importance of developing learner autonomy in e-Learning systems. This paper shows that e-Learning systems are effective in helping learners become autonomous learners, raising self-effectiveness, and acquiring learning strategies. As a result, raised learner autonomy encourages students to study English outside classrooms.

## **Keywords**

learner autonomy, e-Learning, self-efficacy, learning strategy, studying outside classrooms